

(3) 日系アメリカ人の現状

帰国後、ジャパントウンの現状について再度調査をするためにインターネットで検索を試みた。その結果、観光案内から領事館の歴史に至るまでさまざまなサイトがヒットした。そこから興味を引いたのは、「異文化越境喜福倶楽部」⁹⁾と題した中澤まゆみ氏のコラムであった。「移民の絶えた日系アメリカ人の悩み」という報告記事である。

その記事に「日系文化と人口問題」というパートが設けられ、ジャパントウンがもつ悩みが記述されている。その一説をここに紹介しよう。「戦前は50を数えた“日本町”も、今ではサンフランシスコとロサンゼルス、サンノゼの3つを残すのみ。最盛期には30ブロック以上にわたって広がっていたというサンフランシスコのジャパントウンは、今では8ブロックに縮小している。」さらに、続けて「サンフランシスコの日系人口は1万5000人。その60%は平均年齢78～80歳の2世だ。4～5000人の日系人が住むジャパントウンは、今でも商店、企業から各団体や組織のオフィス、教会、新聞社までが集まる市内最大の日系コミュニティだが、ビジネスや施設を支えてきた二世の高齢化と若者離れで、閉鎖が目立ち始めている。」

以上の記述を含め、日系アメリカ人の現状を調査してみると、1970年の人口統計ではアジア系全体の43%であった日系は1980年から1990年の増加率でみると、18%と少ない。同じ期間の増加状態を同じアジア系内で比較すると、中国系は103%、フィリピン系は80%、インド系は111%、韓国系は124%、ベトナム系は151%となる¹⁰⁾。これでは、日系の影響力が低下するのは当然と言えよう。また、こんな推定もある。日系人の配偶者の多くが日系以外であるのが普通の時代になりつつあるということだ。3世では60%、4世では80%前後という数字が出てくるくらいである¹¹⁾。

日本人としてのアイデンティティはどうなるのかという危惧は大きい。日系人口の減少化に加え、配偶者が日系以外で、混血が増え、文化的多様性に富んでくると、日系という民族にこだわらず、民族を超えて、アジア系として連帯していく道を探っていく方向になるだろう。そのひとつとして、アジア系市民グループの間に、日系をはじめ韓国、中国、フィリピン系などが結束してカリフォルニア州の各種選挙で「アジア系統一候補」を確立しようという計画があるのだ¹²⁾。

一方で、ジャパントウンの将来を考えて、商店主、コミュニティ組織のスタッフ、建築家など、20代から80代にわたる年齢層の45人の日系人たちが「ジャパントウンの保存と開発のための調査団」を組織して、町おこしのプロジェクトを始めるとのことだ¹³⁾。

3. ロサンゼルスでの「視線」のありか

全米日系人博物館 (Japanese American National Museum) は今回の研修の最終地であるロサンゼルスにあり、今回の私の個人的興味が詰まった場所である。すでに、サンフランシスコで日系人の現状について触れることができたが、アメリカに暮らす日系人の歴史を、総合的に知ることのできる機会は初めてであった。

この博物館の展示物を閲覧することは、私がこれまで断片的に得てきた日系人の情報をひとつずつ組み立てるジグソーパズルのような行為のように思えた。新館の2階に位置する常設展には、「アメリカに暮らす日系人の百年の歴史」を4段階のステップを踏んで接近できるようになっていた。すなわち、第1ステップは復元バラックで、強制収容所跡から移築したバラック、第2ステップは1世の開拓者が作りあげた初期の日系コミュニティの姿、第3ステップは強制収容所をめぐる日系人たちのさまざまな反応、第4ステップは戦後の日系人が再建したコミュニティ、国家賠償を求める運動など日系人としてアメリカを見つめ直し、どのように生きていくかを考えていくものであった¹⁴⁾。